

# 中越大震災からの復興プロセスを学ぶプログラム開発及び実証実験

公益社団法人中越防災安全推進機構 事務局長 諸橋和行

## 1. 研究の背景と目的

令和6年度に本研究助成事業の採択を得て実施している「新潟県中越大震災から20年のアフター復興プロセス研究」では、中越大震災から20年が経過した地域の多様な関係者を対象にインタビュー調査を実施するとともに、復興プロセス研究会2024、復興評価・支援アドバイザー会議、シンポジウムを開催し、中越大震災からの10年の奮闘がその後の10年に与えた影響等を分析・とりまとめ、地域の現状や知見を言語化することができた。

一方で、2つの新たな課題が見えてきた。一つは、得られた研究成果をこれからの中越地域の地域づくりにいかに還元・反映させるかである。今後さらなる人口減少や行政機能の縮退が予測される中越地域において、前年度の研究成果をもとに、現在の地域づくりの担い手と研究者・専門家がこれから地域づくりをともに考えることが求められている。

もう一つは、得られた研究成果を、令和6年能登半島地震をはじめとした他の災害の被災地復興にいかに役立たせるかである。能登半島地震の被災地では「能登の復興は中越に学ぶべき」との論が散見される。確かに貢献しうる教訓・知見も少なくないと考えられるが、中越地域においては、それらを学ぶための視察研修プログラム等が整備されていない。中越大震災から20年が経過したからこそ伝えられる新たな知見や成果もあり、プログラム開発及びその実証が求められている。

本研究は、令和6年度「新潟県中越大震災から20年のアフター復興プロセス研究」を継承し、その成果を中越の地域づくり及び他地域の復興支援に具体的に落とし込み、災害に強い社会づくりに貢献するため、研究者や次世代の担い手等による研究会、学習コンテンツの整備、モニターツアーを実施したものである。

## 2. 事業内容とスケジュール

本研究で実施した事業は、以下のとおりである。

### ①復興プロセス研究会の開催

令和6年度に実施した復興プロセス研究会を継承し、中越の地域づくりを実践する新たな担い手を地域研究員として加え、昨年度の研究成果（中越大震災から10年間の取組はその後の中越地域の10年間にどのような影響を与えたのか）を踏まえ、これを今後の中越地域に還元するための議論を行うとともに、令和6年能登半島地震の被災地域との交流や中越地域への受入に関する検討を行った。

### ②中越大震災の復興に関する学習コンテンツの整備

上記①の成果に基づき、中越大震災の復興に関する知見や経験を能登半島地震の被災地域に役立ててもらうための方法を検討し、効果的な学習コンテンツを整備（準備）した。

### ③能登半島地震の復興関係者を対象とした中越復興プロセスモニターツアーの実施

上記②の成果に基づき、能登半島の復興に取り組む関係者や地域住民（被災者）を対象とした視察研修を企画し、モニターツアーを実施した（計2回）。また、約15年間にわたり運営されてきた中越メモリアル回廊が令和7年度で終了ということもあり、復興プロセス研究会のメンバーを中心に、最後の「中越メモリアル回廊視察ツアー」を実施した。

事業内容	時期	2025(R7)										2026(R8)			
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
①復興プロセス研究会の開催 (オンライン併用で4回)				① キック オフ 6/2	② 上巻丸 尾花 交際 7/10			③ ツアー 検討 9/29					④ ラスト ツアー 1/27		
②中越大震災の復興に関する学習 方法・コンテンツの整備(随時)		学習方法・コンテンツの検討 ツアープログラム調整													
③能登半島地震復興関係者を対 象とした中越復興プロセスモニ ターツアーの実施(2回)			事前 相談 4/25 新潟県建設 6/3 上巻丸大沢氏・倉持先生	能登 視察 訪問 7/9	事前 相談 8/7 上巻丸 大沢氏				上巻丸 ツアー 10/4-5				事前 相談 1/30 正副 議長	能登 視察 ツアー 1/31	
④成果物のとりまとめ(1回)															成果 とりま とめ

図1 事業スケジュール

### 3. 実施体制

本研究を遂行するため、令和6年度から引き続き、「復興プロセス研究会」を運営した。令和7年度の構成員は、表1のとおりである。

なお、復興プロセス研究会は、中越大震災の4年後、2008年に設立され、県内の若手研究者と復興支援に関わる実務者をメンバーとして、被災地と関わり続けるとともに、「復興とは何か」を真剣に議論した。中越大震災から10年を機にそのプロセスを記録し、論文・報告書・書籍にまとめた。令和6年度、中越大震災から20年という節目のタイミングで、復興プロセス研究会を再結成した。

表1 復興プロセス研究会 構成員

#### 【研究員】

氏名	所属
上村靖司	長岡技術科学大学
澤田雅浩	兵庫県立大学大学院
松田曜子	京都大学
宮本匠	大阪大学
井内加奈子	東北大学
菅磨志保	関西大学
小澤広直	長岡工業高等専門学校
阿部晃成	金沢大学
野村俊介	金沢大学
山崎麻里子	北陸地域づくり協会
筑波匡介	福島県立博物館
諸橋和行	中越防災安全推進機構
赤塚雅之	中越防災安全推進機構
阿部巧	中越防災安全推進機構
石塚直樹	中越防災安全推進機構

#### 【学生研究員】

氏名	所属
吉川直樹	長岡技術科学大学 M2
藤田裕	長岡技術科学大学 4年
中村早希	大阪大学 M1
蓮田和華奈	大阪大学 4年
南太賀	兵庫県立大学 M2

### 4. 事業報告

#### 4.1 復興プロセス研究会

復興プロセス研究会は、表2に示すとおり、オンラインを併用しながら、研究期間中に合計4回開催した。

表2 復興プロセス研究会の開催実績

開催日	参加	概要
第1回 2025/6/2	17名	キックオフ 昨年度の研究成果（中越大震災から20年）を共有し、今年度の事業計画及び事業内容を確認した。また、今年度のメインとなるモニターツアーの実施に向けて、基本的な考え方、パートナーの候補団体（能登半島地震の被災地）について議論を交わした。
第2回 2025/7/10	約25名	珠洲市上黒丸地区 意見交換 パートナー団体として選定した珠洲市上黒丸地区を訪問し、地域住民と復興プロセス研究会のメンバーをオンラインでつなぎながら、中越大震災からの復旧・復興の過程や特徴的な取組、被災地の今の状況を紹介し、能登半島地震からの復興をテーマに意見交換を行った。
第3回 2025/9/29	12名	モニターツアー企画 モニターツアー候補団体（珠洲市上黒丸地区、珠洲市役所、能登町役場、輪島市番場崎商店会）能登半島）の事前ヒアリング及び現地視察の結果を報告・共有するとともに、上黒丸地区の方々から山古志地域を訪れるモニターツアーの内容を検討した。
第4回 2026/1/27	18名	中越メモリアル回廊から 復興プロセス研究会のメンバーに大学生・高専生を加え、令和7年度が最後となる「中越メモリアル回廊」の4施設を巡り、中越大震災の経験や現在の地域の状況を確認しながら、今後の中越大震災の伝承のあり方や学習コンテンツ等について意見を交わした。

## 4.2 中越復興学習コンテンツ

中越メモリアル回廊で提供してきた中越大震災の伝承に関する取組をベースに、令和6年能登半島地震の被災地の方々の力になれるよう、モニターツアーの参加者のニーズや意向を踏まえながら、学習コンテンツを準備・整備した。

### 【山古志】【施設】

#### 山古志復興交流館おらたる

山古志の玄関口であり、中山間地域の再生拠点。新潟県中越大震災での体験や、復興に向けて積み重ねてきた経験を後世へ伝え、「ありがとう」の感謝と山古志の魅力を全国へ発信する交流施設。

- 施設見学
- 大ホール（講演会・交流会等）
- 地形模型シアター
- 直売所・土産物
- カフェ（軽食）
- 語り部・ガイドの紹介・手配
- 観光案内

#### 木籠メモリアルパーク

中越大震災で発生した河道閉塞により集落ごと水没した家屋を震災遺構として保存・展示している公園。地域で運営される直売所・資料館「郷見庵」が隣接している。

- 水没した家屋（震災遺構）
- 記念碑
- 郷見庵

#### 震災復興交流館郷見庵（さとみあん）

新潟県長岡市山古志の木籠（こごも）地区にある、中越大震災の記憶と教訓を伝える震災遺構・資料館。震災写真の展示、農産物の直売、地域住民と来訪者の交流拠点として運営され、木籠メモリアルパークの一部として機能している。

- 農産物・特産品の販売所
- 資料館
- 交流所
- 語り部

#### 山古志復興公営住宅

中越大震災後、被災者が慣れ親しんだ集落で生活を続けられるよう、9つの集落に分散して建設された木造住宅。地域に溶け込む設計で、小規模住宅地区改良事業を活用し、集落の再生と帰村を促進した。震災後に生まれた新しい木造の「中山間地型復興住宅」として、技術や手法が評価されている。

- 住宅見学

#### 山古志の宿 あまやちの湯

長岡市山古志の最も高い場所にある、絶景と山菜料理が自慢の宿泊・日帰り温泉施設。ログハウスやキャンプ場を併設している。

- 宿泊・入浴・食事
- 懇親会
- 各種体験プログラム

#### 山古志アルパカ牧場

2009年にアメリカ・コロラド州から中越大震災の復興支援として贈られたアルパカを飼育する牧場（観光スポット）。震災復興のシンボルとして地域住民の手で飼育されており、現在は油夫（ゆぶ）と種苧原（たねすはら）の2ヶ所の牧場で約50～60頭が生活する。

- アルパカ見学
- エサやり

#### 山古志ごっつお多菜田（たなだ）

長岡市山古志虫亀にある、地元のお母さんたちが運営する人気の農家レストラン。山古志の伝統的な棚田で採れた米や新鮮な地場野菜、山菜を使った郷土料理「山古志めし」を煮物や天ぷらの定食で味わえる。

- 食事
- 山菜・野菜直売所

### 【山古志】【人】

#### 山古志支所長 五十嵐豊さん

- 山古志の震災・復興全般
- 地域の風土、文化、現況
- 人脈・ネットワーク など

#### 山古志木籠ふるさと会 松井智美さん

- 山古志の震災経験
- 郷見庵の運営・案内
- 山古志の食、交流会 など

#### 山古志住民会議代表 竹内春華さん

- 山古志 DAO
- デジタル村民
- 地域復興支援員の活動経験 など

#### 山古志アルパカ村代表取締役 青木勝さん

- 山古志の震災・復興全般
- アルパカ牧場の経営
- 人脈・ネットワーク など

#### 和太鼓奏者 坂牧颯人さん

- 中越大震災の体験
- 和太鼓の演奏・指導

## 【川口】【施設】

### 川口体験交流センター（朝霧の宿 やまぼうし）

125年の歴史を閉じて廃校になった川口地域の旧木沢小学校を再利用した宿泊施設であり、豊かな自然環境等を活用した農村体験及び滞在の場を提供する施設。地域住民で組織する「フレンドシップ木沢」が指定管理を受け、住民主体で運営・管理を行っている。

- 宿泊・食事
- 各種体験プログラム

## 【川口】【人（団体）】

### フレンドシップ木沢

長岡市（旧川口町）木沢地区で、やまぼうしの運営や地域活性化イベントを行う団体。2002年に結成され、中越大震災からの復興を機に、地域内外の交流（防災キャンプ、山菜採り、インターンシップの受け入れ等）及び定住の促進に取り組んでいる。

- 木沢集落の案内
- やまぼうしを活用した交流
- 中越大震災の体験語り など

## 4.3 モニターツアー

### 4.3.1 能登半島事前ヒアリング

中越地域モニターツアーの実施に先立ち、能登半島地震の復興関係者を対象とした現地ヒアリング及び視察を行った。

○日程：2025年7月9日（水）～11日（金）

○目的：能登半島地震の関係者を対象とした中越地域モニターツアーを実施するため、事前ヒアリング及び視察を行い、関係を構築し、ツアーの企画や対象者選定に活かす。

○内容：

- ・ 珠洲市上黒丸地区視察
- ・ 上黒丸地区代表 意見交換
- ・ 上黒丸地区復興勉強会
- ・ 懇親会
- ・ 珠洲市副市長訪問
- ・ 能登町役場 意見交換
- ・ 輪島市在住支援者 意見交換
- ・ 輪島市内視察



写真1 上黒丸地区復興勉強会

### 4.3.2 珠洲市上黒丸・長岡市山古志交流ツアー

珠洲市上黒丸地区での事前ヒアリングの結果から、長岡市山古志を視察し、地元の方々と交流するツアーを企画・実施した。

○日程：2025年10月4日（土）～5日（日）

○参加：石川県珠洲市上黒丸地区の方々 17名

長岡市山古志地区の方々 約20名 ほか

○行程：

1日目（10月4日）

- ・ 14:00 山古志復興交流館おらたる 集合・視察
- ・ 15:00 木籠メモリアルパーク・郷見庵 見学
- ・ 16:00 山古志住民会議 意見交換
- ・ 17:00 山古志の宿あまやちの湯（チェックイン）
- ・ 18:00 上黒丸・山古志交流懇親会

2日目（10月5日）

- ・ 9:30 山古志アルパカ牧場 ガイド案内
- ・ 11:00 山古志ごっつお多菜田 交流・昼食
- ・ 12:00 解散



写真2 震災復興資料館 郷見庵にて記念写真



写真3 上黒丸・山古志交流懇親会



写真4 山古志支所、山古志住民会議 意見交換

#### 4.3.3 珠洲市正院・蛸島地区&長岡市山古志・川口交流ツアー

復興プロセス研究会メンバーのつながりから、珠洲市正院・蛸島地区との関わりができ、中越地域の方々と交流するツアーを企画・実施した。

○日程：2026年2月21日（土）～22日（日）

○参加：珠洲市正院・蛸島地区の方々 12名  
長岡市山古志地域・川口地域の方々 約20名  
復興プロセス研究会メンバー 8名

○行程：

1日目（2月21日）

- ・14:00 山古志復興交流館おらたる 集合・視察
- ・15:00 木籠メモリアルパーク 視察  
郷見庵 見学、語り部、交流会
- ・16:00 意見交換（山古志支所、山古志住民会議）
- ・17:30 山古志の宿あまやちの湯（チェックイン）
- ・18:00 正院・蛸島地区・山古志交流懇親会

2日目（2月22日）

- ・9:10 山古志復興公営住宅 視察
- 【山古志コース】
- ・9:30 山古志アルパカ牧場 視察、意見交換
- ・11:00 山古志出発
- 【川口コース】
- ・10:00 山古志木沢集落 散策  
朝霧の宿やまぼうし 視察・意見交換
- 【両コース合流】
- ・11:30 朝霧の宿やまぼうし 昼食・交流
- ・12:30 解散



写真5 正院・蛸島地区・山古志交流懇親会

#### 4.3.4 最後の中越メモリアル回廊ツアー

約15年間にわたり運営されてきた「中越メモリアル回廊」は、現在のすがたでの営業は令和7年度をもって終了となる。移転・一時休館等、状況が変化する中越メモリアル回廊施設を含めた冬の中越地域を見て回り、復興プロセス研究・他地域への伝え方・関わり方の議論の推進・とりまとめに役立てるため、復興プロセス研究会のメンバーを中心に、最後の中越メモリアル回廊視察ツアーを企画・実施した。

○日程：2026年1月27日（火）

○参加：復興プロセス研究会メンバー（研究員・学生研究員）10名、兵庫県立大学の学生 3名、長岡工業高等専門学校 of 学生 5名

○行程：中越メモリアル回廊の4施設（長岡震災アーカイブセンターきおくみらい、おぢや震災ミュージアムそなえ館、やまこし復興交流館おらたる、川口きずな館）を巡る。

## 5 総括

本研究において、当初予定した事業をすべて完了することができた。以下に主な成果を総括する。

### (1) 中越復興プロセスモニターツアーについて

能登半島地震の復興関係者を対象としたモニターツアーは、当初は1回の計画であったが、結果として珠洲市上黒丸地区及び珠洲市正院・蛸島地区の方々を対象に計2回開催することができた。

いずれの地区においても、実施前に復興プロセス研究会のメンバーが現地を訪問し、意見交換を行った。ツアーに先立ち、関係者と対面で信頼関係を築くとともに、先方の顕在的・潜在的なニーズを丁寧に聞き取った。そのうえで、中越地域の特性に合わせたプログラムを検討し、地元のキーパーソンと連携して企画を練り上げたことが、大きな成果を上げた要因といえる。

上黒丸地区の参加者からは、「地域の方ともっと話を深めたかった」、「より若い世代の方にも参加してもらい、対話の機会を作る必要がある」といった声が聞かれた。また、正院・蛸島地区の参加者からは、帰着後に『山古志と木沢のみなさんの温かさ、豊かさ、そして「今、伝えなければ!」という気迫と熱量に強く励まされました。みなさんも行けてよかった、と口々におっしゃっていて、来週早速身内でのミニ報告会を計画しています。いただいた温かい気持ちやお土産をみなさんでシェアしながら、今後も歩んで行けたらと思っています。』という連絡をいただいた。

ツアー後、受け入れ側である木沢集落の方からも「珠洲は移住者の受け入れに取り組んでいる。ぜひ一度行ってみたい」との声が上がった。また、山古志の「郷見庵」の方々（山古志木籠ふるさと会）は、今回の出会いを契機として、実際の上黒丸地区への炊き出し交流へと向かわれた。

モニターツアーを通じて出会った被災者の方々が、将来の歩みに対して前向きな気持ちになれるよう尽力できたことは、本研究における何よりの意義であった。中越大震災からの20年の知見を形骸化させることなく、今まさに困難に直面

している能登の復興支援という具体的なアクションへと繋げることができたことを大変嬉しく思う。

### (2) 中越復興学習コンテンツについて

中越復興プロセスモニターツアーに際して、山古志地域を中心に「中越復興学習コンテンツ」を整備した。また、令和6年能登半島地震の発生からまだ2年という時期に配慮し、中越の経験や教訓を一方向的に提示（押し付け）することは避け、能登と中越の被災者同士による対面での「生の声」の交流を重視した。中越大震災から20年以上が経過し、過疎化・高齢化が深刻化する中であっても、力強く歩み続ける中越の人々の「生き様」に触れていただくことこそが、最も重要であると考えたためである。

その結果、中越地域の真のポテンシャルは、「学習プログラム」という形式的な「静的コンテンツ」に留まるものではないと確信した。むしろ、復興の知恵を携え、現在も熱量を持って地域づくりに邁進する「中越の人々」との交流が生み出す「動的コンテンツ」こそが、他地域の心に最も響く価値である。両地域の住民が交流する中で、意図せぬ相乗効果が生まれ、新たな気づきや活力が次々と創出されていく。

ツアーの企画においても、当研究会が全体プロデュースを担いつつ、現地のエリアプロデューサー（地域キーパーソン）のディレクションによって、既存の資源（静的コンテンツ）を活かした「動的コンテンツ」の創出が可能となった。それは一見、即興的（出たところ勝負）に見えるかもしれないが、現場の確かな信頼関係がある以上、期待を裏切るものにはならないという確信がある。また、「被災地を少し離れ、まずは息抜きに来てほしい」という受容の精神が根底にあり、これこそが「中越らしさ」の本質でもある。

現在、中越メモリアル回廊及び関連施設の移転や機能の見直しが進められている。新しい中越メモリアル回廊の再設計に向けて、本研究で得られた知見と成果を最大限に活かしていきたい。